



大臣のほんねとく ● 構造改革特区担当/地域再生担当大臣 村上誠一郎

カブトムシおじさんの挑戦

もうすぐ学校は夏休みに入ると思いますが、私は夏休みになると、よくカブトムシを取りに行っていました。今でも、カブトムシは子供達の人気者でしょう。

このカブトムシを全国の幼稚園や保育園に無償で配って、自然や命の大切さを子供達に教える活動を行っている人がいます。九州で酪農を営んでいる内田龍司さんです。内田さんは、牛の糞を使った堆肥の中でカブトムシがたくさん育つことに気づき、28年前からカブトムシを配布する活動を始めました。ところが、昨年、内田さんの活動が大きな危機に直面しました。家

畜排泄物処理法という法律が施行されることになり、堆肥の野積みが禁止されることになったのです。堆肥が地下水を汚染しないよう、堆肥をビニールシートで覆わなければならなくなったのです。

しかし、それではカブトムシが飛んできて堆肥に卵を産み付けることができなくなりますが、これまで続けてきた活動も断念しなければなりません。内田さんは、本当に困つて悩んだそうです。

そんな時、内田さんは、たまたま新聞で、若手県遠野市の「どぶろく特区」の記事を見て、地域を限定して規制の特例を認める構造

改革特区のことを知ったのです。それから内田さんはカブトムシの配布活動を続けるため、特区の活用ができないか検討を始めました。牛の世話を代わりにやってくれる人を探さなければならぬなど、大変な苦労をされたそうです。しかし、全国の子供達にカブトムシを届けたいとの一心でがんばり、ついに特区を実現したのです。

あまり知られていませんが、内田さんのように、特区の提案は個人でも企業でも誰でもすることができるとは、何か事業を始めたい、地域に役立つ活動をしたいと思つた時に、国の規制が邪魔になるな

ら、是非、特区の活用を検討してみてください。

小泉構造改革によって、国の規制は個人の力でも変えることができるようになったのです。我々は、そうした個人や企業の思いを大切に受けとめ、全力で応援します。

今年も、内田さんが送ってくれたカブトムシを、全国の子供達はキラキラした目で観察するようになっていきました。そして、そのカブトムシは、内田さんが特区の実現に挑戦した結果、無事子供達に届くことになったカブトムシなのです。

※構造改革特区推進本部ホームページ
<http://www.kantei.go.jp/singik/ouzou2/index.html>

※日本改革前線
<http://www.zensen.jp/>

※大臣プロフィール
<http://www.kantei.go.jp/koizumi/idaiji/040927/17murakami.html>



シリーズ少子化 ● 花王株式会社研究開発部門

父親と育児

高橋秀和

私は2002年に育児休暇を取得した。当時、男性の育児休暇取得は極めてまれであったと記憶している。妻に育児取得を提案されたときには、子供と長時間過ごせることと時代の最先端の制度活用で魅力を感じたこともあり、安易な気持ちで2ヶ月間の育児専門を引き受けることになった。

しかし、1週間も経たないうちに、子供と過ごす気楽な休暇予定が夢想であったことに気がついた。生後数ヶ月の乳児の世話で、自分のために使える時間は全くなかった。

後悔したが後には引けない。食べさせ、排泄させ、清潔を保ち、な

でさすりと、一人の人間はいかに手間をかけて育まれるか、身を持って実感した。育児に苛立ちやストレスを溜める母親達の気持ちを多少なりとも理解できるように became 気がする。

休暇を終え職場復帰した今、育児2ヶ月の経験は意味があったと強く実感している。両親ともに同等の育児能力を有することは、ストレスなく共働きを実現する上で重要な条件であるばかりでなく、家族の絆、信頼関係もより強固にしている。

また、父親の育児・家事への協力の重要性を感じる一方で、企業や地域社会の協力を感謝している。

復帰当時、月に数回は子供が体調を崩し、その都度、両親のどちらかが会社を休むこととなった。また、仕事中、保育所から急な発熱の連絡があり、あわてて帰宅することもしばしばあった。

さらに、急に帰宅できない両親のかわりとなり、子供の世話をしていたいたいた社会福祉協議会のファミリーサポートセンターなどが子の成長に個人を超えて大きな組織の協力を得ている。

人口減少により将来的に労働力、企業競争力の低下は避けられない。そんな中で男女ともに優秀な社員の力は不可欠であり、なによりも「働きたい」という意志は尊重され

るべきであると思う。

男性の育児参加によるストレスなく楽しい「共働き」と、個人枠を超えた企業・社会の「子育てサポート」は、企業力の向上と地域の活性化のために、そして少子化対策の有効な手段となりつづくと考えている。

最後に我が家の近況を。最近専ら私が家事をこなすことが多く、子供と過ごす時間も多し。その為か息子は私の言うことは良く聞く一方、「ママバイバイ」と妻にソッポを向くことが多い。

少し妻が可哀相な気もするが、職場では、世のお父さんの気持ちに分かるお母さんとして目置かれ

る存在となりつつあるようである。

※執筆者の紹介
<http://www.kantei.go.jp/jp/m-magazine/backnumber/2005/takahashi.html>